



創作実験劇場 2018年3月17日(土) 灘区民ホール

作品 「5分前・いま・5分後—わたし」 「波紋」 「すすきが原の月に誘われて」 「ここじゃない—ここにいたい」 「風を宿す」
「凧」 「知る—生きる悲しみ」 「みのむしの 音を聞きに来よ 草の庵 芭蕉」
出演 穂井田瑞 坂本まつり 谷川結香 吉川菜々子 岡村春花 中野菜歩 坂本のより 門家由采 新田小夏 菊原麻理奈
田口寧々 稲益夢子 田中文菜 平岡愛理 板垣祐三子 石井麻子 向井華奈子 かじのり子 菊本千永 金沢景子 寺井美津子

5分前・いま・5分後—わたし 菊本千永

時間は連続している？どこかで切り取ったら元に戻る？切り取った過去はいまのわたしが思う過去と本当にぴったり重なる？それより、本当にいた？5分前のわたし。本当にいる？5分後のわたし。

波紋 平岡愛理 田中文菜

ある物事の影響が次々と周囲へ広がっていく。小さな波紋はやがて広がり大きな波紋となる。
1つの波紋が他の波紋と重なりながら幾度も広がる。 私たちの波紋はどこまで広がって行くのだろう…

すすきが原の月に誘われて 寺井美津子

毎週車で通る道沿いに、一面すすきが生い茂っているところがあります。冬枯れのすすきの穂に月光が当たると、白く光り、何とも美しく、妖しく、ふと、車を止めて、異次元となった野原を歩きたい衝動に駆られます。そういえば、だいぶ昔に、安達ヶ原の鬼女が、月の薄が原で、鬼から解放されて、童女のように舞う歌舞伎を見たのを思い出しました。私も、今宵、ひと踊り。

ここじゃない—ここにいたい かじのり子

今、居る場所や道をここじゃない、と感じることがあります。それが自ら選び望んだことやものであっても。ここじゃなければ一体どこなんでしょうか。何なんでしょうか。答えはよくわかりません。ただ、自分で心の底に向かって「あなたは本当はどうしたいの？ここにいたい？いたくないの？どこに行きたいの？」と小さく問いかけた時、「ここにいたいな。ここに居させて欲しいな。」と呟くのではないかと思います。ここじゃない、と、ここにいたい、は相入れないようで、同時に在るものなのかもしれません。ここじゃない、と思って初めて、また、ここで頑張れるような気がします。

風を宿す 金沢景子

どこからともなくやってくる香ばしい焚き火の煙。潮の香り。林の匂い。雲の流れ。深呼吸すると心の中に懐かしい風景が広がります。風が運んでくれるたくさんの思い出、出会い、出来事が、いまの私の一部分になっています。音楽は東京を中心に全国でご活躍なさっているジャズピアニストの坂本千恵さんに作曲していただきました。ジャズのスタイルは色々ですが、振付するのはわたしにとっては新たなチャレンジです。今回は録音で踊ります。

凧 向井華奈子

沿岸地域では、気圧傾度が弱く天気の良い日には日中に海風・夜中に陸風が吹く。海風から陸風へ切り替わるときの無風状態。風力0の状態。元旦に初日の出を見た際に、神戸の海も寒風となっていました。新しい一年、新しい1日の始まりの合図でした。終わりと始まりに0にリセットされる。何かが生まれて何かが終わる合図のような…そのように思えて。

知る—生きる悲しみ みのむしの 音を聞きに来よ 草の庵 芭蕉 藤田佳代

藤田は去年、5月と11月に左右の股関節手術を受けました。二本の足でしっかりと歩けるようになりました。二回目の退院は無理を言って早くに退院させてもらいました。今回の創作実験劇場の振付の初日は12月23日。退院早々踊れるわけではないので、先生たちに振付を覚えてもらって、出演者に振り移しをしなければいけません。それで、一週間ほど早めに退院してきました。みのむしって知っていますか？みたことがありますか？さわったことがありますか？…わたしは yes です。でも、どんな生活をしているのか知りませんでした。それで、いろいろと調べました。みのむしは自分の命を守り、命をつなぐ大仕事をします。いっしょうけんめいに生きています。こんな踊りを創りました。見に来てくださいね。

はじめて そうさくじつけんげきじょうに でられて うれしいです。みのむしのうごきは むずかしいけど がんばっています。坂本まつり (小3)

さいしょはできなかつたけど できるようになって うれしくて だんだんたのしくなつた！ 穂井田瑞 (小3)

私は、みのむしを見たことがなかったので最初はあまり興味がありませんでした。なので、うまく踊れるか不安でした。けれどみのむしの一生を知り、とてもびっくりしました。踊りもとてもおもしろいので毎回練習がとても楽しみです。本番も楽しんで踊りたいです。吉川菜々子 (小4)

私は、教えてもらう日までわくわくしていました。でも、いざ行ってみると知らない人もたくさんいて少しくんちょうしました。全部を通すようになってから、先生やジュニア生の人たちのおどりをみていると、知らないジャンプやわざをすごいな～と思いながら家で練習したりしています。でも、ぜんぜんできないです。でもやっぱりおどるのは楽しいな～と思います。すごく勉強になります。谷川結香 (小4)

私はミノムシのせなかをクネクネするのが苦手だったけど、少しできるようになってよかったです。また、後ろ回りをきれいにできるようになったと思うので、それもよかったです。
岡村春花 (小5)

みのむしの、メスは外の世界を見ずに、死んでしまうのは、かわいそうだと思います。なぜなら、広い世界を見ずに卵を産んで死んでしまうからです。みのむしのおどりは、葉を食べる動きやくねくねしながら走ったりするのが難しいです。でも、とてもおもしろいです。
中野菜歩 (小6)

今回このみの虫をおどることで難しいことがたくさんあって、みのむしのくねくねした動きを表現するのが難しく、失敗することもたくさんありますが、研究して頑張りたいです。30秒一人でのおどる所があるのですが、そのおどりは自分なりにみのむしを想像してつくったので、本当のみのむしのような動きが出来るように頑張っておどります！
坂本のより (中1)

創作実験劇場で踊るみの虫は、上半身を動かしてみの虫のようにおどるのがとてもむずかしいです。今までにしたことがない動きなので、体を使うのが大変でした。30秒間一人で作ったふりつけは、みの虫のイメージをおどりに表現することができました。本番が楽しみです。
門家由采 (中2)

私は今回2作品出演します。一番苦戦したのはみの虫が殻の中でどう動いているのか何を考えているのかを、自分の動きに表現することです。本番では練習の時よりも表現力を高められるようにしたいです。
新田小夏 (中2)

この作品のために、まつりちゃんがミノムシを教室に連れてきてくれたとき、私は初めてミノムシを見ました。特に私たちが住んでいる西日本ではほとんど見られなくなってしまったミノムシ。そんなミノムシがどんな一生を送っているか知っていますか？
風に揺られ新しい葉に移ると枝や葉の表皮をかじって丈夫なみのを作ります。大人になったメスの姿はハネも足もありません。メスは一生みの中を過ごします。すぐに卵を産み始めて、赤ちゃんが孵化する頃には死んでしまい、みのから落ちてしまうのです。切ないミノムシの一生ですが、赤ちゃんに命は繋げられています。そんな切ない人生を私たちは特徴的なくねくねとしたミノムシの動きで表現します。ぜひ見に来てください！
菊原麻理奈 (中3)

初めて30秒もの長いソロを自分で考えたので、工夫がむずかしかったです。みのむしの背中をクネクネした動きを取り入れたくて、みのむしの動きを自分なりに想像してねじりを入れたり工夫してみました。
田口寧々 (高1)

ありがとうございました！！

向井華奈子モダンダンスリサイタルⅡ 11月18日(土) 神戸ファッション美術館 オルビスホール

「砂の女」「HANANA／再生の花」「破れた世界で」「沈黙を破って—正延正俊氏の絵に触発されて」(作舞・藤田佳代)

出演 寺井美津子 金沢景子 菊本千永 かじのり子 石井麻子 板垣祐三子 山田麻以 梁河茜 平岡愛理 田中文葉 稲益夢子

原田光琉 菊原麻理奈 渡邊菜子 門家由采 新田小夏 石井希実 坂本のより 中野菜歩 岡村春花 吉川菜々子 向井華奈子

ゲスト出演 堤悠輔

2回目のリサイタル、多くのお客様にご来会いただきました。ありがとうございました。

いつもいつも思うのですが、佳代先生をはじめダンサーの皆さん、裏で支えてくださる多くの方々はもちろんですが、観てくださるお客様がないと成り立たないことだったと、感謝の気持ちでいっぱいです。心より感謝申し上げます。そして、改めて、自分が踊りが好きなのだを再確認し、これから先、踊り続けている自分を想像し見つめています。どうか、これからも皆さまのお力をお貸しください。
向井華奈子

向井華奈子の5年ぶり2回目のリサイタル。現代の社会を素直な目で真剣に観て作品を創る人であることをあらためて感じる舞台だった。

特に印象に残ったのは、最初に上演された「砂の女」。安部公房の同名の小説を元に、砂穴に閉じ込められた男(堤悠輔)が、ひたすら砂をかき生活をおくる女(向井華奈子)との時間を過ごすうち、その環境を受け入れ、脱出の機会が訪れても逃げなくなる—1962年発表と、半世紀以上も前の小説だが、そこに描かれる象徴的な人間の姿を、現代の私たちを取り巻く状況と照らし合わせ表現したことが興味深い。次の向井の自作自演のソロ

「HANANA—再生の花」は、坂本龍一の曲に乗せて、福島原発事故による土壌の放射能を出す物質を吸い上げて咲く花を描いた作品。苦しみを受け入れ自然に咲く花を描いた秀作。ヘンデルの曲に乗せて踊れるダンサー3人、菊本千永、かじのり子、向井華奈子が踊った「破れた世界で」は、動きのおかしみも上手く使って最後には何か確かなものを掴んだようだった。最後は師である藤田佳代が具体美術の正延正俊の絵に触発されて創った「沈黙を破って」。団体の力を結集しての群舞とともに幕を閉じた。
菘あつこ 関西音楽新聞(Classic Note)2018年1月1日号より

ふれあいの祭典2017 ひょうご洋舞フェスティバル 11月4日(土) 兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホール

「雷鳴への連禱」 振り付け 加藤きよ子 出演 門家由采 新田小夏

ふれあいの祭典に出演して、加藤先生の作品に出させてもらい、いままでにしたことのない踊りができたのでとても楽しかったです。良い経験になりました。
門家由采 (中2)

私はふれあいの祭典に出演するのは、二度目です。今回は自分の教室を離れての出演で、練習が始まった頃はとても緊張していましたが、練習を繰り返すうちにだんだん環境に慣れていき、自分の踊りができるようになっていきました。本番では良い踊りができたと思います。いろいろな先生方、ありがとうございました。
新田小夏 (中2)

ご冥福を心からお祈り致します。

石牟礼道子さんが亡くなった。近代ということをやっと考え続けた方だった。水俣病を知らしめた著作、『苦界浄土』には、汚染前の美しく豊かな海とその海に寄り添い生きる人々も描かれる。その関係が美しくあるほど、汚染された海と病となった人々の悲しみが強烈に心を刺す。

沖縄、辺野古からの手紙が届く。わたしたちはまたしても、海を失うのか。それでいいのだろうか。手紙の一部を許可を得て記載する。

「貴重なサンゴがあります。ジュゴンの餌となる海草があります。貝が生息しています。蟹とかの小動物が逃げ場を失っています。コバルト色をした小魚が右往左往しています。海亀の上陸地点がふさがれています。海鳥が近寄ってきません。青い色の海水が灰色に濁っています。海の神はまだ怒ってはいません。私たちの祈りは足りないのでしょうか。」